



2010年6月23日放送

## 漢方医人列伝「原南陽」

北里大学東洋医学総合研究所 漢方診療部 星野 卓之

原南陽は、日本漢方が独自の発展を遂げた江戸時代後期に、実践的な臨床家として有名になった名医です。その著書は広く読まれ、創りあげた処方方は後世に引き継がれて、現在でも高く評価されています。今回は原南陽の生涯とその業績をご紹介します。

原南陽、名は昌克、字は子柔、通称玄璵は、1753年（宝暦3年）に水戸藩医の家に生まれました。先祖には甲州で武田信玄に仕えた原昌胤がおり、武家の子孫であるという誇りを強く持っていたと言われていました。京都に遊学して実践的な医術を身につけた後、侍医として30数年の長きにわたり水戸藩に仕え、多くの著作と220名に及ぶ門人を育成し、1820年（文政3年）に没しました。

原南陽が学んだ京都は当時、学術の中心で、医学のメッカでもありました。南陽は山脇東洋の子、東門と、産科で有名な賀川玄悦・玄迪に最新の実践的な医学を学んでいます。山脇東門には古医法や瀉血・刺絡治療を習いました。刺絡やお灸の技術・知識は、後に狂犬病などの治療書『瘰狗傷考』や経穴・ツボの解説書『経穴彙解』に生かされています。また南陽は産科を重視し、賀川流では腹を按じて胎位を見分ける方法や様々な手術法など、書物では身につけることができない産科的な手技を習いました。賀川流産科については、蘭学における知見と一致し実地に即しているという点でも高く評価をしており、事実江戸

後期には産科医の8、9割は賀川流となったと言われていています。このように原南陽は漢方の古典について該博な知識を有するのみでなく、手技や治療の実践を重視した臨床家でもありました。浅田宗伯の『皇国名医伝』では、「その技倆は卓越し、名は東国をおおい、その治療は専ら適用を主とした」と紹介されています。

南陽が水戸藩の侍医に召し抱えられたいきさつについては、森立之の『遊相医話』に面白い逸話があります。

京都で医学を学んだ後、江戸の小石川にて按摩や鍼灸で生計を立てていた南陽はもともと酒好きで、毎日飲み屋で顔を合わせるうち近くに屋敷があった水戸藩の役人と飲み友達になり、その紹介で治療を頼まれることも多くなって、酒代には困らないぐらいにはなっておりました。たまたま水戸の殿様が暑さにあてられて急病となり、江戸中の名医を呼んでも治らず危篤に陥ったため南陽が呼ばれました。昼寝をしていた南陽は水戸侯の容体を聞いて、行きがけに薬屋で巴豆三粒と杏仁三粒を錢九文で買い、懐に入れて水戸藩邸に行きました。服を着替え診察した南陽は乾霍乱という診断をして、「処方の名前は申しあげにくいですが御快復の上でお話する」とのみ伝えて、懐から出した巴豆・杏仁を茶碗ですりつぶし熱湯でかきまぜて差し上げました。そして「一時間ぐらいで吐き下しがあれば御病気は治るでしょう。このような窮屈なところで待つのは難儀なので、台所の隅でもよいので熱燗を一升ほど頂戴したい」と言い、事実その通りに一時間後に吐き下しがあって水戸侯は人事不省から回復しました。周囲の人は驚き感服して、酔っ払い昼寝をしていた南陽を呼び、ようやく起こして診察させました。南陽は、「使った処方是有名な『金匱要略』の走馬湯であり、これにて完全に治ったので後の薬はいらない」と言って、心配する周囲の医師を諭しました。この手柄をきっかけに、九文の元銭で五百石の侍医に召し抱えられたという話が、当時人々のうわさになったというのです。実際には原南陽は侍医であった父が亡くなった1773年(安永2年)に家督を継いで百五十石を賜る医師となっていたという記録もあります。

原南陽の著書には、先に挙げた『瘦狗傷考』・『経穴彙解』の他、軍陣医学としては我が国で最初の出版である『砦草』、自ら収集した経験処方や当時の医家と交わした治療に関する書簡を載せる『寄奇方記』、37の医説をまとめた『叢桂偶記』、そして南陽による口授を門人が筆記・校正した『叢桂亭医事小言』などがあります。なかでも『叢桂亭医事小言』は医学総論・診察法から病症別の治療法まで、南陽の医術を具体的に示す代表的著述として臨床的に高く評価され、和文で平易に書かれていることもあり広く流布しました。この巻七の叢桂亭家蔵方には、今日でもよく用いられる乙字湯や九味檳榔湯が収載されています。

南陽が創った処方には甲乙丙丁を冠したものがあり、なかでも乙字湯は痔疾の特効薬として有名です。もとは柴胡・黄芩・升麻・大黃・甘草・大棗・生姜の七味からなる処方でしたが、浅田宗伯が当帰を加え、大棗・生姜を除いて六味としたものが、現在エキス剤として保険収載され広く用いられています。甲字湯は桂枝茯苓丸に生姜と甘草を加味したも

ので、瘀血の激しいものに用いられます。九味檳榔湯は和方の七味檳榔湯に加味して、脚気で気血凝滞して腫れる者に用いる処方として創られました。構成生薬は檳榔子・紫蘇葉・厚朴・枳実・橘皮・桂皮・大黄・木香・生姜からなり、やはり浅田宗伯がこれから枳実を除いて甘草を加えたものを家方としました。さらに浅田流の加味である呉茱萸・茯苓を加えたエキス剤が現在入手可能で、高血圧や動脈硬化などがあり、頭痛・肩こり・心悸亢進・倦怠感・便秘を伴うものに用いられています。

実際の治療においては『傷寒論』を重視し、まず入門した弟子には『傷寒論』を暗記させました。しかし「方に古今無し」とも述べ、『傷寒論』など古典の理論に習熟した上で、新しい処方でも効果のあるものは用いました。「博く方法を学んで是を約にする」、つまり運用を簡潔にするよう指示しています。

最後に『叢桂亭医事小言』に載っている症例をご紹介します。南陽が疫病の治療を引き継いだ 2 例で治療が奏功せず、死に至らしめたことがありました。困り果て朝夕の食も進まず、人に会うのも面目なく、一日閉じこもっていたところ、たまたま手に取った書物に附子（トリカブト）を用いることが書いてあり、陽証に似た陰証もあるということに気がつきました。附子を使っていれば助けることができた残念に思っていた折りに、一人の武士が疫病にかかり診察の依頼がありました。やはり下すべき承気湯の症状と思われ、前の医者が出した薬も大柴胡湯でしたが、枕元でしばらく見ていると、少し手を出すかと思えば引っ込めて外気や風を嫌がる様子があり、足も少し冷えていました。患者の家族は「死んでも恨まない。一さじの薬でもいいから処方してほしい」、と南陽に懇願したので、小柴胡湯に茯苓四逆湯という附子剤を合わせて与えたところ、翌朝には口の乾きが治り、3、4日後には話ができるようになり、2週間の治療で完治しました。この経験から、下すべき承気湯と違って疑わしい時に附子の症状がないかよく調べて用いると非常に効果があるということを門人たちと追試してつきとめ、さきほどの処方を柴胡四逆湯と名付けて様々な疾患に応用できると説きました。

このように正直に自らの失敗とそこから得た教訓を紹介し、すべて実践・経験の面から医学をわかりやすく教えた原南陽の姿勢には、現在の医療に関わる人々にとっても学ぶところが多いと言えましょう。つい 200 年ほど前に原南陽が世に示した、実証的な医療と真摯な態度は、本間棗軒ら弟子の他にも、幕末の浅田宗伯を含む多くの漢方医に引き継がれていくこととなります。